

## 6 坂尾呂神社本殿（綾部市睦寄町）建造物調査

岸 泰子

### 1. 概要

歴史学科では、2018年度より地域貢献型特別研究（ACTR）として綾部市君尾山光明寺ならびにその周辺地域の文化遺産の総合調査を実施している（代表 横内裕人）。令和2年度には光明寺の文化遺産調査の一環として、光明寺をささえてきた奥上林地区の文化遺産も調査対象とすることになり、神社ならびに総代をはじめとした地元の方々の協力を得て、令和2年（2020）9月23日に、坂尾呂神社本殿の建造物調査を実施した。

綾部市睦寄町にある坂尾呂神社は、君尾山光明寺の南側にある奥上林地区の氏神として崇敬を集めてきた神社である。江戸時代には神社と光明寺とのつながりがあったようで、本殿庇にかかる寛文3年の吊灯籠は光明寺南谷坊の聖寿から寄進されたものである。

調査は、安部萌花（京都府立大学文学部歴史学科2回生）、山岸常人（京都府立大学文学部特任教授）、岸が担当し、調書の作成、平面図の実測、写真撮影、史料調査を行った。

### 2. 坂尾呂神社本殿

**【概要】**坂尾呂神社は、綾部市の上林谷の北西部、睦寄町（奥上林地区）に位置する。氏子圏は奥上林地区の6つの集落からなる。境内には、本殿のほか、3基の鳥居、社務所、倉庫、若宮神社などの摂社がある。

**【構造形式】**本殿は三間社流造の建物である。屋根は柿葺で、正面中央部に軒唐破風が付く。

**【建設年代】**普請文書があったというが、現在の所在は不明である。ただし、その写しを光明寺住職が所蔵している。それをみると、寛政6年（1794）に造営が始まり、その5年後の同11年に落成したことがわかる。棟梁は庄村の喜兵衛がつとめ、大工として地元の政七のほか、「宮方普請巧者」である若狭日置村（現福井県高浜町）の彦兵衛の弟子が関わったとある。虹梁絵様の様式からみても18世紀後期とみて齟齬はないだろう。なお、当社には慶長8年（1603）、元和3年（1617）、元禄元年（1688）の改造の履歴を寛政11年に写した札も残っている。

**【評価】**坂尾呂神社本殿は三間社流造の装飾豊かな建物である。普請文書の写しから建設年代や関わった大工も明らかである。外陣の床下の工夫なども珍しい。当地域の近世後期の神社本殿を代表する遺構のひとつとして評価できる。現在、本殿は覆屋のなかにあり、保存状態はよい。早急に文化財指定（登録）されることが望ましい。

**【構造・意匠など】**身舎の柱は円柱で、切目長押、内法長押、木鼻付頭貫でつなぐ。頭貫の上には台輪トメを載せる。組物は拳鼻付の出組実肘木、中備は藁股である。壁付の通肘木と丸桁・虹梁の間に蛇腹支輪を入れる。軒は二軒繁垂木である。妻飾は二重虹梁太瓶束笈形付であ



写真1 坂尾呂神社本殿正面

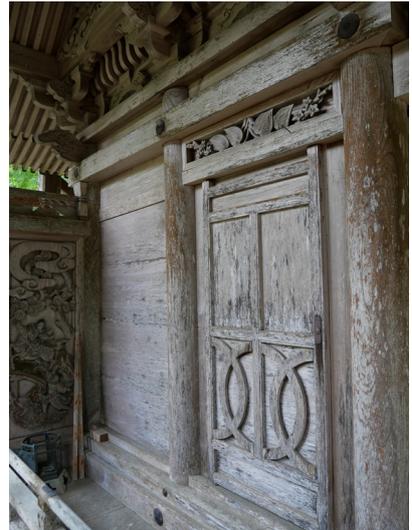


写真4 坂尾呂神社側面詳細



写真2 坂尾呂神社本殿身舎組物詳細



写真5 坂尾呂神社本殿外陣内部



写真3 坂尾呂神社本殿側面・妻飾



写真6 坂尾呂神社本殿外陣床下

る。妻面全面が華麗に飾られている。身舎の四方には切目縁をまわす。縁の両脇間に入る脇障子には中国の故事（左側には黄公石と張良か）を主題とする彫刻が填まる。正面に付く木階は五級で、浜床・浜縁が付く。身舎の正面の柱間には菱格子戸を填める。側面柱間第一間には棧唐戸を入れる。身舎の縁には腰組を組む。縁束の頭部に木鼻付の貫を入れ、その上に台輪を載せ、拳鼻付の出組を組んで縁葛を受ける。彩色はない。

身舎は前後に二分して、外陣と内陣からなる。内外陣には各柱間に幣軸構の板扉を入れる。外陣の天井は格天井、内陣の天井は鏡天井である。床は拭板を敷く。外陣の床の一部を外すと床下に入る階段があり、外陣の床下にある部屋に入ることができる。ここは現在、収納として使われている。改造の痕跡はない。おそらく、当初から収納場所として使われていたのではないかとと思われるが、珍しい仕掛けである。

庇の柱は几帳面取の角柱で、木鼻付虹梁形頭貫でつなぐ。木鼻はいずれも動物彫刻が施しており、各柱の正面側にも付く。組物は三斗枳肘木実肘木である。中備は、中央部が獅子彫刻、両脇間は臺股である。身舎と庇は海老虹梁でつなぐ。

軒唐破風の妻面は波兎の彫刻で飾る。

当本殿の特徴としては、装飾の豊かさがある。身舎・庇ともに中備に彫刻を用いている。手挟や身舎の木鼻、庇の持送りには割り抜きの彫刻がある。また、身舎の建具の上の小壁には植物をモチーフとした彫刻を埋める。虹梁絵様は渦・若葉ともに発展している。妻飾の彫刻も華やかである。いずれも奇をてらった意匠や様式ではないが、丁寧な造作してある。

最後に、今回の調査では中・上林地区にある神社の本殿も見せていただく機会を得た。そこで、これらの神社本殿や筆者が調査した丹波市の神社本殿と坂尾呂神社本殿との比較も整理しておきたい。

中丹・丹後地域の近世後期の神社本殿の意匠は派手なものが多い。坂尾呂神社本殿もその一例といえるが、室尾谷神社（一間社流造）は庇の中備に躍動感あふれる龍などの彫刻を置き、さらに独特な形の組物で正面を飾る。身舎の正面に入る菱格子の扉の上方には、坂尾呂神社と同じく彫刻が填まる。妻側は組物を二手先尾垂木付とし、尾垂木の先端を兎や象などの動物彫



写真7 坂尾呂神社本殿庇詳細（中央部）



写真8 坂尾呂神社本殿庇見返し

刻とする。身屋桁の鼻先は線形とする。この形式は丹波市春日・市島町の神社本殿でも確認できる。坂尾呂神社よりも規模が小さいが、組物や尾垂木の意匠が独特である。

また、同じく上林谷（中上林）にある八幡宮本殿は、棟札から文化12年（1815）の建設と判明している。建物は規模の大きい一間社流造で、その前に軒唐破風造の向拝（拝所）を設ける。向拝の正面ならびに側面の頭貫の上には龍などの彫刻を置く。頭貫木鼻には獅子や象などが彫刻される。この本殿も室尾谷神社と同じく意匠的に派手である。さらにこの本殿については、棟札から大工は播州来住村（現西脇市）の兵右衛門、彫刻は丹波の柏原町に拠点を構えていた中井権次（政忠）が関わったことが知られる。西脇の大工は、丹波市など丹波・丹後地域での活躍が知られる。上林谷には京都市中と丹波さらには丹後地域を結ぶ街道沿いに集落が形成されている。他地域の技術や意匠を取り入れる条件が揃っていたのであろう。

以上の事例と比較してみると、坂尾呂神社本殿は他の事例と同じく派手であるが奇をてらわない、いわば正統的な意匠・形式でまとめられている点に特徴があるといえよう。また、若狭の大工の関与や、その若狭の大工と地元の大工との協働という点も注目される。

参考文献

京都府文化財保護基金編『京都の社寺建築 中丹編』  
（昭和56年）



写真9 室尾谷神社本殿庇詳細

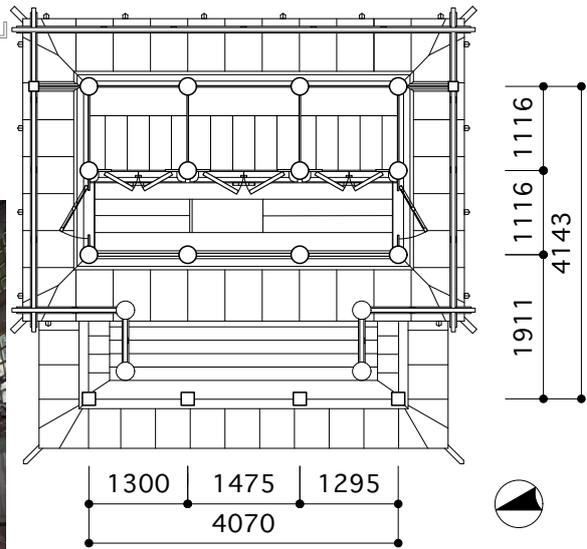


図1 坂尾呂神社本殿平面図（1/100）



写真10 八幡宮本殿全景



写真11 八幡宮本殿向拝詳細